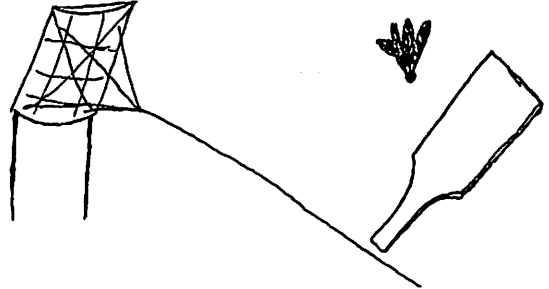


# 談話会通信

# No.30



あけまして  
おめでとう。



## 住所変更

- 林 俊夫 さん 〒306-01 群馬県 山田郡 大間々町 大間々1339.  
佐藤 幸子 さん 〒233 横浜市長瀬区 日野町 856-3  
澁南台 住宅 16-103.  
田中 穂積 さん 〒591 大阪府 堺市新金岡町 3丁目1番  
3棟40号  
熊田 憲一 さん 〒190-11 西多摩郡 羽村町 羽 1448

## 氏名変更

- 田中 理恵 さん → 熊田 理恵 住所は ↑ 上に同じ。  
西島 啓一 さん → 増原 啓一

## 冬の観察・採集会 2月17日(日)

日時：2月17日(日) 10:00.A.M.より 雨天・雪天 決行。

集合場所：国鉄横浜線・橋本駅前(八王子より3駅目)

観察採集場所：津久井・城山

持ちもの：昼食・採集用具・筆記用具

※ 場所については、通信29号を参照して下さい。

※ 季節や場所的に積雪・降雪の可能性もあります。

防寒着や雨具等を御用意した方が良いでしょう。

連絡先 高橋 登 044.288.2921  
松浦 祐司 044.422.2842

# 自分の



# ページ

(きまじれポスト)

● 松本誠治さんより。

小説を読んでいましたら、沈  
のようなくだりがありました。  
"Yes, I'm glad I went, and such  
a quaint dear cheeky baby, Clifford,"  
said Connie. "It's got hair just like  
Spider-webs, and bright orange,  
and oddest, cheekiest, pale-blue  
china eyes."

クモの網を、くりの髪とはど  
んなものでしょうか。この少  
し前には、

"Good bye, Josephine," said Connie,  
kissing the baby and ruffling its  
red, wispy hair.

というのがありました。  
wispyであり、また Just like  
Spider-websである髪とはどん  
なのか興味があります。む  
しろ、Spider-websの正体の方  
が興味あります。

羽矢謙一氏の訳(講談社刊)  
では、wispyを"ぼやぼやの"  
としてありました。

この小説の時代は、1900年初  
めから1920年代の誌で、場所  
(クモの網の話)は、イギリス  
のツェフィールドの近くです。  
主人公 Connieは、少女時代  
もドイツで暮したことがあります。作者は、イタリア・ア  
メリカ・セイロン・オースト  
ラリアを訪れたことがある人

ですが、イギリスにいはいよ  
うなクモの網のことをイギリ  
ス人に話させるようなことは  
しなれど思います。

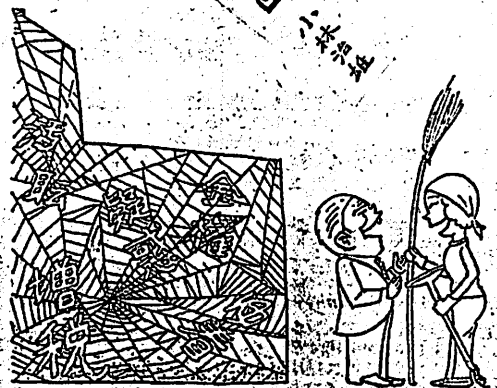
いろいろ考えても、全く見当  
もつきません。ゴクマーのよ  
うな感じとも思えるし、イナ  
ツマコククガモ住居網とも思  
えるし、まどい後の分散の際  
に引かれた子がそのしおり糸  
の束のようにも思えますが、  
何ともいえません。考証して  
みようと思いついたために、小  
説の題名を紹介しておきます。

D.H. Lawrence (1928)  
*Lady Cattarley's Lover.*  
クモの網のくだりは10章に  
出ています。

● 熊田憲一さんより

79. 9/8 毎日.

山崎の新聞  
二巻



「大掃除?」中略、のお方のやることじ。  
ありませんよ」

『蜘蛛守』二題

小沢栄樹  
さんより

(K1) 10月20日、その日の高尾山は、前夜の台風のため6号自然路で山くづれ。その地あちこちらの樹木は根がおぬ、11た11たしかつた。ビワ滝から200米ほど登った岩のところに、一人「クモ人」を観察している。山路の上の方から、数人のパーティが下ってきた。突然目の前に、和人が立った。なんと、大分県の蜘蛛守、菊屋奈良義さんである。自然保護協会の研修で、初めて高尾山に入らぬ由。時間がなく、急ぎ足で下りていく。その後、お借りしていただき、菊屋さんもびっくりした由。「日本人にはあり」とも「クモ人」にはあり」と平氣にあり。小生も同感であり、関東の山中で、九州の「クモ人」にお目にかかるとは感激である。菊屋さんは、大分県のキウグエに付き、今も、その保護に情熱をかける。平氣の最後には、「あつた。山中のクモを追いかける道を思い浮かべ、私も九州で追いかけてみたつもり、頑張った」とあった。

(K2) 「実業の日本」というと、

「クモ人」には、11た11た縁の遠い話であるが、この歴史ある総合雑誌新誌の1986年の新年号に、丹沢蜘蛛守の、わたしがエース、山川守さんが登場した。「特集」として、クモ人、サラリーマンの知的武装」に編集部が目をつけていた。

活版2頁にわたる山川さんのライオンが、見事に書かれています。「丹沢の石研究」は「323種」「研究対象」として未知の分野で、十数年間も付き合った。見出しは大きい。文中の2.3を二紹介してみる。

- 見出しから「趣味の悪いクモ人か……」という声も聞くが、よく観察してみると、その生態はむしろ面白い。
- 生態を解明するには、和の一生を素直に足らぬという。と小田、たし、深い研究対象を持つては、和は大満足している。
- 集めて標本を採集しては、できるだけ多くの人に見せようのが和の念願である。
- 別に本業をもつのは、国鉄マンの熊田君一君が例外的研究家という。
- クモの研究を始めたことが、物事に集中できる力をよめたおとしお。
- 和は近く結婚するが、そのクモの研究はつづける……などである。編集部が筆を強めた部分もあると推察するが、「クモ人」万才。

●鈴木勝浩さんより

忘れ難い 1979年8月27日

先古屋での第11回東亜蜘蛛学  
 会の終了した翌日は、私のク  
 モ採集史上最高の日であつた  
 ような気がする(1979.12.23現在)  
 学会をおえたり私は、新海氏の  
 御好意により、ガニの鈴木氏  
 ガトウムツの佐藤氏といひ、  
 しょに三重方面へ採集に行く  
 こころが起きた。松坂市で一  
 歩すすり、翌28日、友人との  
 集地は沢めていい。新海氏  
 のテレパツシーダがたよりで  
 ある、  
 大台町がおねり大宮町にはい  
 ったすぐ、新海氏の色がついに  
 はじめた。新海氏からテレンに  
 ツーを感しにらしい。突然  
 イントを左にきり国道からい  
 別れて、町道へ分ぐらいい  
 入ったところや、アカツ  
 車から降りるやハナツを見つ  
 イ口トリノフンダマツである。  
 ける。勿論、新海氏はアカツリ  
 統ヤテ新海氏はアカツリ  
 ノフンダマツ産卵しそ、超特大(オ  
 オトリノフンダマツを連続バ  
 オンケでみつける。私も必死。  
 で歩いても、歩いても、と、  
 後を歩いても、歩いても、と、  
 ても、私の口にはトリノフンの  
 ガマツがはい、てくれたいの  
 でした。  
 ところで、袖も、クモの神様  
 だけとは味方しません。私に  
 もオトリノフンダマツの卵  
 トリノフンダマツ、えたいの  
 知れぬ卵のうをみせて下さ、

たのでした。  
 調子にの、私には、カネコト  
 タテグモを探している新海氏  
 もどんどん離して突進。ふと  
 み上げると、金色に輝く、尾  
 がものすこい角産で高くた、  
 ているオダカグモがいたの  
 す。私は今まで、三宅峠にお  
 いてビーティンリによつてし  
 かオダカグモを採集していな  
 かつたのですが、やはり、ハ  
 ンドソーティンリで採集す  
 といいことは、感慨深いもの  
 があります。  
 オダカグモを採集してかえ  
 るほど先の大工トリグモが  
 みの大工トリグモを採集し  
 徘徊していた。今までは採集  
 たことのないアシブトハ工  
 トリハ工トリグモが、いりく  
 んでいるところからアツグ  
 トハ工トリグモが入るこ  
 るすきす涙をのんだ。そ  
 ちよと眼を右へ、そらした  
 たん黒色のトゲのついた球  
 の卵のうが眼には、いた。  
 鬼わが「新海先生」と大  
 イセキグモのうの底の部分  
 がもはいました。新海氏は、  
 こでテントでもは、徹夜観  
 察するかとあ、しゃい  
 が、もうだめです。わ  
 からぬまま、すでたい  
 人の中へ卵のう付マ  
 七キグモはい、てい  
 した。新海先生もす  
 せん。  
 それにしてもほんとうに新海  
 氏のテレパツシーダは驚  
 た。ガゲゲの鬼太郎を

るすばらしいものをも、こい  
 るのです。  
 ひととおりの採集をおわり車  
 へもどった時、時計はP.M.1:00  
 近くをさしていました。みは  
 腹がすいていゝのですが、新  
 海氏は食事しようとはいい  
 ません。私達にこういふので  
 す。「サカゲケムツゲを  
 とるまでは昼食にしないよ。...  
 うー、やはりこの絶食にも耐  
 えて、まてクモを採めようと  
 するのがクモのテシパーと感  
 受できる秘密なのか。  
 数時間後、またもや新海氏は  
 ハンドルを左にまわす。そへ道  
 は車も通れないほど。しかた  
 なしに歩くことにする。いく  
 らい、てモトリノフンダツ  
 しかいはい。私が引き返そう  
 としてモ返るは新海氏。しか  
 たなくいくと、今度は新海氏  
 が、卵のう付マメイタイセキ  
 が、こまると、  
 2度車を止めたところ、2  
 度とも卵のうも、たマメイ  
 タイセキがモが生息していた  
 のです。  
 もう新海氏の才も感というか、  
 長年の経験によって鍛えぬ  
 いてきたともおもわれる鋭い  
 ものには、脱帽せずにはおれ  
 ません。  
 おそらく1979年8月21日とい  
 う日は、私にとって生涯忘れ  
 ることができない日の一つに  
 なることだろうと思います。

2月遅れで、アメリカクモ  
 学会のニュースレター“*Ameri-  
 can Arachnology*”が初めて到着  
 しました。オ20号です。冊子  
 の小口をホケキスでとめて、  
 裏表紙に直接宛先と切手を張  
 った省力・省資源の宛本のよ  
 うな郵送法でした。内容は、  
 眼についたものだけでなく、  
 文献や標本の交換希望や借入  
 ・寄贈希望欄が“*Research Res-  
 earch*.....”と題してありまし  
 た。また、ボストンのWGBH-  
 TVから“*Life on a Thread*”と  
 題する映画が放送されたこと  
 (これはエゲゼターへのクモ学  
 会でも映写されたようです)  
 が記録されていたり、クモの  
 分布の拡大の報告や、研究者  
 の消息欄がある、たりしていま  
 す。その中で、W.S. Bristowe  
 が1979年1月11日、77才で亡く  
 なったことも記されています。  
 またH. Nemenyも1979  
 年7月19日に亡くなっていま  
 す。Arachnologyという欄も  
 あり、今回はサソリに関する  
 クイズが10問ありました。興  
 味のあつたE.L. Simonにつ  
 いて、略歴や業績が5頁にわ  
 けて載っていたことは、うれ  
 しいかぎりでした。その他  
 に、1979年のアメリカクモ学  
 会西部地区の大会(Western  
 Region Meeting)の講演抄録  
 が載っていて、大変参考にな  
 りました。

●松本誠治さんより。  
 アメリカクモ学会 ニュースの  
 要約的なものを読みました。

・松浦祐司

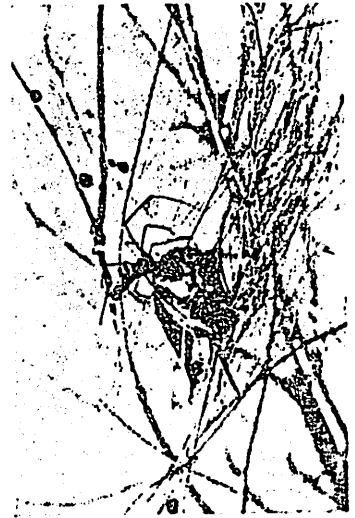
より

捕食したという  
のは、初めての  
記録だそう  
です。

### 鳥を食べたクモ

1978年、8月から9月にかけて、八重山諸島へクモを採集に行ったさい、8月30日、石垣島、パンナ岳のふもとの牧場の立ち木で、鳥がクモの網にかかって捕食されているのを発見。すでに鳥は死亡していたので、写真を撮ったのち、しばらくのあいだ観察した。クモは、オオジョロウグモ *Nephila maculata* であり、捕食されていた鳥は、野鳥の専門家である高野伸二先生に写真を同定していただいたところ、体長15cmほどのリュウキュウツバメであると教えていただいた。

このクモの体長は、5-6cmほどで、造網性クモ類のなかでは、日本一の大きさである。その網はひじょうに丈夫であり、ふつうのクモの網



ならば、ひっかかったところで難なく破りぬけてしまうこのツバメも、クモを捕食しようとして近づいたのであろうが、この網だけは破りぬけられなかったため、逆に殺されてしまったのであろう。ツバメもだいが暴れたらしく、直径1cmほどの網も半分ほど壊されていた。クモはツバメの首から頭にかけて食いつき、体液を吸収しているところであった。

松浦裕司 211 川崎市中原区高宿612

採集と飼育 第41巻7号 1979-7



・高橋桂子さんより

←

談話会の会員用に左のような

（マンガの中にあるように、外出禁止の病院にだけ出して買ってきた）  
マンガのタイトルをろてて下さいますか？  
ゆかたはいいかがでしようか？

# 談話室

## ★ 昭和55年度 活動計画

1979年12月16日(日) 運営委員会によ、て昭和55年度の談話会活動計画が決定いたしました。

### ・ 採集観察会

55年 5月11日(日) 場所 養沢周辺(東京)

7月27日(日)

世話人 新海栄一氏

10月10日(金)

56年 2月15日(日)

### ・ 例会

6月15日(日) 場所 目黒区立大橋区民会館

世話人 鈴木勝浩氏

貞元己良氏 等。

### ・ 合宿

8月1~3日

(金・土・日)

場所については2月17日の採集会にて運営委員会を開き決定する。

### ・ 三会合同例会

11月30日(日) 予定

## ★ 東亜蜘蛛学会 第12回大会のお知らせ

昭和55年 8月23、24日(土・日)

場所：東京 (中野サンプラザの日本私学教育研究所)

※発表希望の方は準備をしておいて下さい。

# けいじ板

## KISHIDAIA 編集より

45号の原稿は、昨年12月末日を  
もって締めきりました。

46号の原稿を募集しています。  
原稿が集まらないとKISHIDAIA  
は出ません。  
みなさん、よろしく。(嶋田)

## 慶事板 Part III

小沢さんからのお便りにも  
ありましたが、山川 守哉・  
松田まゆみさん  
加藤笑子さんが御結婚  
される運びとなりました。

詳細は、D.C.I.A (談話会中央  
情報局)によって調査の上皆様  
にお知らせいたします。

尚 昨年11月に御結婚された。

熊田 憲一  
理恵

夫妻の新居は、

〒190-11

東京都西多摩郡羽村町  
羽 1.448

一戸建て住宅だそうです

以上 D.C.I.A.

### • お礼

昨年11月にお送りしました  
名簿は、梅林カエルの感化に  
よるものです。

毎年作っていただいて  
ありがとございます。

来年もよろしくお願いします。

(談話会全員のり)

### • 編集後記

30号遅くなり申し分りあり  
ません。

私は卒論に追い回されながら  
80年を迎えました。

皆様は、良い80年を迎え  
られたことと幸いです。

これからは、通信をもっと数多く  
出してゆく予定です。

皆様からの原稿をお待ち  
しております。(松浦)

## 東京蜘蛛談話会

通信 30号

55年 1月 20日 発行

本部

〒191 東京都日野市豊田1896

荻嶋 泉 方 TEL 0425  
(81) 7128

通信原稿受付

〒211 神奈川県川崎市中原区  
荻宿 612

松浦 祐司 TEL 044  
(422) 2842